

大阪インターナショナルチャーチ
2016/7/31
ウィル・コトレル氏
ルカ 8 : 43-48 「絶望する人への希望」

ルカ 8:40-48

8:40 さて、イエスが帰られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたからである。
8:41 するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。 8:42 彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。 8:43 とときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、 8:44 イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。 8:45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。この大ぜいの人が、ひしめき合って押ししているのです」と言った。 8:46 しかし、イエスは、「だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから」と言われた。 8:47 女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第とを話した。 8:48 そこで、イエスは彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」

アメリカの著名な思想家ヘンリー・デイヴィッド・ソローは、人生について考え、次のような結論に達しました。「大多数の人々は、静かなる絶望の日々を送っている。そして、その絶望を抱えたまま墓に入る。」彼は、周囲の人々がある種の絶望を感じながら生きているのを目にしました。状況が変わってほしい、幸福や平穏を手にしたい、と望んでもいっこうに実現しないのです。努力は報われず、墓に入っても安らかではありません。私たちも、こういう経験をしたことがあります。計画がとん挫したり、人間関係が壊れてしまったりすることもあれば、平穏を与えてくれると期待した物事が実際にはそれほど満足を与えてくれないということもあります。こうして、私たちも静かなる絶望の日々を送るのです。新約聖書に、長年絶望を抱えたままの女性が登場します。イエスとこの女性の出会いは、私たちの感じている絶望に触れます。

長血をわずらった女の話は、ただの興味深い話ではありません。この話は、墮落した人間の絶望的な状態を教えてください。また、その状態に対処するためにイエスが来てくださったことも教えてください。これからルカとともに、この女性の心の旅路を覗いてみましょう。彼女の呪いと癒し、そして癒しの要因を見ていきたいと思えます。ではまず、呪いについてです。

1. 呪い (43-44 節)

- a. この場面は、42 節の後半が背景となっています。「イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。」イエスはガリラヤに戻ってこられたところでした。ルカは、イエスの周りに大勢の人々が押しかけ群がる様子を描きつつ、名もないひとりの女にスポットを当てます。
- b. ルカは 43 節で、「ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、」と語り、この女性のつらい人生について触れます。
 - i. この女性は、12 年も出血が止まらないという症状を抱え、衰弱していたことでしょう。彼女は悲惨な絶望の人生を送っていました。みことばにあるとおり、この女性は財産を使い果たして治療にあたりましたが、まったく症状は改善しませんでした。マルコの福音書には、かえって悪くなる一方だったと記されています。

- ii. この女性は、お金を使い果たして貧しかっただけでなく、おそらく貧血気味で非常に弱っていたでしょう。この病気は、健康な体も財産も彼女から奪ってしまいました。
- b. これだけでもたいへんなのに、この健康不良には社会的問題と霊的問題が伴います。ユダヤの教えでは、この女性は 12 年間継続して汚れた状態であったことになるからです。
 - i. 現代文化では、すべてをきよいものと汚れたものに分ける考え方はありませんが、聖書にはそれが存在します。実際、きよいか汚れているかという問題は、ユダヤ文化における思考の重要な部分を占めていました。ユダヤ人の世界では、すべてが「きよい」と「きよくない」に二分されていたと言えるでしょう。それは、清潔か不潔かということではなく、儀式的なきよさです。つまり、神のご臨在の中にいるのにふさわしいかどうかということです。実は、この世界観は、私たちが神の御前における自らの状態をよりよく理解する助けとなります。
- c. この女性の深い悩みを理解するには、ルカの福音書を読むユダヤ人の考え方について少し知る必要があります。
 - i. では、レビ記 15 章を開いて、25-27 節を読みましょう。

15:25 もし女に、月のさわりの間ではないのに、長い日数にわたって血の漏出がある場合、あるいは月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合、その汚れた漏出のある間中、彼女は、月のさわりの間と同じく汚れる。 15:26 彼女がその漏出の間中に寝る床はすべて、月のさわりのときの床のようになる。その女のすわるすべての物は、その月のさわりの間の汚れのように汚れる。 15:27 これらの物にさわる者はだれでも汚れる。その者は衣服を洗い、水を浴びる。その者は夕方まで汚れる。

ここに何度も「汚れる」という単語が使われているのがわかります。一節ごとに何度もこの単語が登場します。

- ii. それだけでなく、この個所で「漏出」と訳されたヘブル語の単語は、「ニッダター」または「ニッダー」です。この単語は、「別離」や「隔離」を意味する単語の派生語となっています。また、旧約聖書では、この「ニッダー」という単語は、罪や汚れの比喩として使われました。
- iii. つまり、汚れた人はよそ者として扱われるのです。汚れを他の人に広げないようにと、社会的・霊的な隔離を強いられます。神殿で神を礼拝することはできません。他の人に汚れを移さないためです。それが、この女性の抱えていたつらい悩みでした。
- d. この女性は、社会から追放された人間です。神は、人が初めて罪を犯したときに呪いをかけられましたが、この女性はその呪いのしるしを深く刻まれた人でした。病気で体は弱く、社会から受け入れてもらえない存在でした。どこに行っても、自分が汚れているという自覚と、触った人も物もすべて汚してしまうのではという恐れが付きまといました。彼女は、呪いのしるしを体内に持っていて、彼女自身にも周囲の人にもそれを癒すことができませんでした。
- e. 私たちも同じです。
 - i. この個所は私たちについての核心を突いていると気づくべきです。この女性の中に、神の御前における私たち自身の霊的立場が見えるからです。新約聖書に登場するイエスの癒しの奇跡は、そのほとんどが健康問題を取り上げつつ、呪いから癒されない無力な私たち自身の状態を示すために用いられます。
 - ii. では、この「呪い」はどこからやってきたのでしょうか。聖書は、それが進化の過程でなんとなく起こったことではないと教えます。アダムとエバが神に背いた結果、すべての被造物が呪われてしまいました。神は、「土地は、

あなたのゆえにのろわれてしまった。」とおっしゃいます。新約聖書はこれについて、世界が「虚無に服した」と語ります。苦しみ、汗、病気、人間関係の崩壊、死、これらすべてがこの世に侵入しました。私たちはここですべて挙げ尽くせないほどあらゆる形で、この虚無を経験しています。

- iii. 私たちは、それらのことが悲劇だと認めつつも、「仕方がない。自然の法則には逆らえない」と自分に言い聞かせます。しかし聖書は、それが本来あるべき姿ではないと教えてくれます。

私は今年に入って、このことを実感しました。病院のベッドに横たわる祖父の遺体のそばに立った私は、祖父がもういないという事実には必死に抗（あらが）いました。こんなことがあってはならない、という思いでした。よく知っている人はずなのに、その時、まるで見知らぬ人が横たわっているように感じました。その状況のすべてが、何かものすごく間違っているように思えました。皆さんも、身近な人を亡くしたり、周囲で何かが起こったりして、そんなふう感じたことがあるかもしれません。

病気や死、空しさといったものは、神がもともと意図されたこの世の姿ではありません。呪いをもたらしたのは罪です。すべての被造物は、いずれ朽ちてゆく空しい運命を背負わされました。それが今私たちの目にする世界です。途方もなく大きな反逆の結果を実感しているのです。

- iv. では、このような状況の中で、私たちはどういう立場なのでしょう。結論から言うと、群衆の中でのあの女性と同じ立場で、私たちは皆、神の御前では汚れたよそ者です。創造主との和解を望みながら、私たちを創造主から引き離す呪いから自分をきよめることができません。

- v. そして、この女性のように、自分の汚れをどうにかしようと必死に動きます。本当にそうなのです。人間は、心を穏やかにするためにあらゆる努力をします。

成功しているという実感を得るために、学問を究めたり、よい就職先を求めたりします。孤独を忘れるために旅行を計画したり、人とのつながりを求めたりします。これらのことは、それ自体に問題はありませぬ。しかし、多くの場合、すべての物事があるべき本来の姿ではないという思いを押し殺し、間違っているという感覚を寄せ付けないための逃げ道にされます。けれども、それはうまくいきません。満たされない人生に対する歯がゆさへと再び引き戻されてしまいます。そこに平安はありません。

聖書の真理は語ります。私たちには、どんなに時間とお金をかけても、どんなに努力しても誰も癒すことのできない病があります。私たちのたましいに深く刻まれた、取り去ることのできないしみです。私たちの生きる世は墮落しています。まともに考えるなら、これを否定はできないはずで

- vi. 先週の学びに登場した女性の話に通じるところがあります。私たちも、私
- たちを汚す呪いに気づかなければ、あの女性のようにイエスのもとに行くことはないでしょう。あの女性は、癒される唯一の望みだとイエスのことを考えました。

今日の個所に登場した女性は、肉体的にも社会的にも呪いを負っていました。この呪いのせいで、彼女は財産も人生も奪われました。私たちも正直になれば、この女性の中に自分自身の姿が見えるはずで

す。感謝なことに、この話はここで終わりではありません。この女性は、呪いを負っているかもしれませんが、癒しもちゃんと存在していました。では、癒しについて見ていきましょう。

2. 癒し (44 節)

- a. この女性は、イエスが町にいると聞きました。病を癒してくれるナザレのユダヤ人の先生です。このお方は、傷ついた世界から人々を救うためにこの世に生まれてくださった神ご自身です。しかし、この時点で彼女はそれを知ることすらありません。もしかすると、人づてにイエスのことを聞いただけかもしれません。それでも、その聞いたことを信じました。
- i. ここにいる私たちクリスチャンも、最初はそのようにしてクリスチャンになりました。イエスについて聞いたことを信じたのです。この女性は、すべてを知っていたわけではありませんが、このイエスという男性を信じてみようという思いになりました。
- b. その信じる気持ちが、信仰によってリスクを冒すよう彼女を動かしました。
- i. 忘れないでください。この女性が触れる人も物もすべて汚れるのです。そして、大勢の人がイエスの周囲にひしめき合っていました。きっと、たくさんの人を汚してしまったことなのでしょう。もし見つかったらどうなるのでしょうか。無謀な行動をしたと厳しく罰せられ、殺されてしまうかもしれません。
 - ii. 誰であっても、イエスのもとにやってくるにはリスクが伴います。
家族の反対に遭うこともありますし、住んでいる国によっては殺される可能性もあります。
論理的な考え方を捨てたとか、自国の文化や風習を否定したと人から思われることもあります。弱い人間だとか、よほど困っているのだらうとか、だまされやすい人だとか思われることもあるでしょう。非科学的でばかばかしい教えを信じていると思われることもあります。
 - iii. けれども、イエスのもとにやってきていただくものは、そのようなリスクをはるかに上回ります。
- c. 女性の状況が瞬時に変えられる。
- i. この女性の癒しで、ルカはあることを対照的に描き出しています。この女性は、イエスの着物の裾をほんの少し触っただけでした。それが、12年という年月とお金をかけても医者や誰ひとり治せなかった病気が瞬時に癒されました。44 節に「たちどころに」とありますが、これは、43 節の「十二年の間」と対照的に記され、人々を驚かせます。病はすべて拭き去られてなくなりました。彼女の汚れは取り去られたのです。
- d. これは、体の癒し以上のことを意味します。先ほど読んだレビ記の内容を思い出してください。彼女は人生を取り戻しました。自由も取り戻しました。もうよそ者ではありません。地域の暮らしにもう一度戻れるのです。
- i. 会堂に行くことも、祭りに参加することもできます。友だちを作ったり、結婚して子を産むこともできるかもしれません。イエスの力と、イエスを信じる彼女自身の信仰によって、この女性は社会の輪の外から中へと戻ることができました。
 - ii. イエスとの出会いひとつで、彼女のすべてが絶望から平安へと変えられました。その瞬間に、呪いが取り去られただけでなく、完全に取り消されたのです。

ここまでで、この女性の呪いと呪いの癒しとの内容がわかりました。では、なぜ癒されたのでしょうか。魔法でしょうか。それとも何か不思議な力が加わったのでしょうか。次の箇所では、イエスがこの女性に面と向かって、癒された理由を説明なさいます。

3. 癒しの要因 (45-48 節)

- a. この話は、女性が癒されて日常生活に戻り、イエスがそのままヤイロの家に向かうというふうにはなりません。ルカは、「わたしにさわったのは、だれですか」というイエスの一見おかしな発言を記録しています。

- i. 想像してみてください。イエスの周りには大勢の人が押しかけていました。そんな中、「わたしにさわったのは、だれですか」とおっしゃったので、ペテロは「こんなにたくさんの方がいるのに、何をおっしゃっているのですか」と誰もが思うことを口にしました。危篤の子どもを助けに行く途中だというのに、イエスは、誰がさわったかと言って立ち止まられたのです。
- b. 人前に呼び出されたこの女性がどれほどびくびくしていたか、容易に想像できます。イエスは何をしようとなさるのでしょうか。この女に触れられて汚されると怒るおつもりでしょうか。
- c. イエスは「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」とおっしゃいました。この発言には誰もが脱帽するはずです。
 - i. この個所で、「女」と呼ばれていた女性を、イエスは「娘」と呼ばれました。この女性にとって、イエスの口から初めて聞いた言葉が、「娘よ」だったのです。12年間もよそ者として生きてきた女性にとって、この一言がどれほどの力を持っていたか想像できるでしょうか。12年間も汚れていると人から避けられていた人に向かって、イエスは「娘よ」と言ってくださいました。12年間の孤独で傷ついた心はイエスを信じる信仰によって即座に解放されました。
 - ii. 「女」という単語は、無味乾燥な総称ですが、「娘」には親しみが込められています。ルカが対照的に描き出したものが見えてきましたか。イエスとの出会いで、あるひとりの「女」から「娘」へと変えられ、呪いは取り去られ、絆が取り戻されました。
- d. それが大切なポイントです。この出会いをとおしてルカが教えようとしているのは、信仰は一人ひとりの深いところに関わるものであり、つながりを生むものなことです。
- e. この女性は、人知れず癒されようとやってきましたが、望んでいた以上のものを得ました。彼女は、イエスというお方ご自身と顔を合わせ、群衆の前で自分のしたことを証言することになりました。もはや、誰にも知られずにはいられません。
 - 1. イエスは、ただ彼女を癒すのではなく、この女性と出会い、家族に迎えようとしてくださいました。イエスを信じる信仰が私たちをきよめるのだという事実を、この女性だけでなく私たちすべてが知ることをイエスは望まれます。
 - 2. イエスは、赦しを得るための道具ではありません。イエスはあなたともつながることを望んでおられます。イエスに気づかれないままではできません。救われることと、キリストと関係を築くことは切り離せません。どちらかだけを得ることはできません。イエスを信じることは、個人のとても深いところで起こることなのです。
 - ii.それが、福音の神秘です。神は、ただ罪を拭い去って、私たちが振り出しに戻し、あとは罪を犯さないよう自分で頑張りなさい、とはおっしゃいません。私たちの罪は赦されました。そして、望む以上のものを与えられました。神との関係へと導き入れられるのです。神が深い関心を寄せられるのは、ただ私たちが罪をきよめられることにとどまりません。罪を取り去られたことによって、神との交わりを得ることです。これこそ、クリスチャンにとっての大きな報いです。ただの人からイエスの友、そして神の子となるのです。
- f. しかし、注意深く読むと、ある疑問が湧きます。この女性の触った人や物すべてが汚れるのなら、イエスはどうでしょう。またレビ記には、癒されるために罪のためのいけにえをささげなければならないと記されています。彼女のいけにえはどこにあるのでしょうか。救いは本当にそんなに簡単なものなのでしょうか。イエスは力を

与えてくださり、ことばでそのことを確認してくださるのでしょうか。それでは罪の深刻さを軽んじることにはならないのでしょうか。

- i. ルカの福音書もイエスのお働きも、一貫してエルサレムに向かって進んでいきます。この個所のもう少し後で、イエスは友人たちに向かって、ご自身が死ぬために来られたとおっしゃいました。この女性は知る由もないことですが、イエスは、彼女の汚れを十字架まで負って行かれ、死ぬことで取り去った罪の贖いをなさるのです。
- g. 私たちの汚れが取り去られるための代価として、イエスの血が十字架上で流されました。イエスは、この女性がきよめられるためにささげられるいけにえはご自身であることをご存知でした。この女性を社会の輪の中へ戻すために、神の子が捨てられたよそ者にならなければなりません。イエスはこの女性の呪いと私たちの呪いを取り去られました。それは、イエスご自身へと移されたのです。ルカの福音書に登場するイエスとの出会いのひとつひとつに、救い主の手に打ちこまれる釘の音がこだましているのです。

自分はまだクリスチャンではない、イエスに人生をささげていない、という方に向けて、お伝えしたいことがあります。今日、来てくださって本当にうれしいです。今日の個所が言おうとしているのは、今日イエスは私たちの町にいるということです。そのことをぜひあなたに知っていただきたいと思います。今日のみことばの良い知らせは、イエスを信じるなら、あなたがずっと抱えてきた罪から洗いきよめていただけることです。あなたにも平安が訪れるのです。人間の墮落によって人は神から引き離されています。それが原因で感じる不安や焦燥感は、完全に取り去ることができるのです。今日の聖書個所の女性のように、イエスのもとに来て、イエスにつかまりたいと思いますか。この女性の行為は、しっかりした計画もなくやり方も完ぺきではなかったかもしれませんが、それは重要な問題ではありません。彼女が信頼した救い主が完ぺきなお方だからです。このお方は、十分な力をお持ちです。その力で、過去・現在・未来のすべての罪を取り去り、神との正しい関係にあなたを立ち戻らせ、平安を与えてくださいます。イエスは今日、この町におられます。

キリストに従う私たちには、今日の個所から、「イエスと私との関係はどうだろう」と自問するよう促されます。それは、クリスチャンとして生きることの否定できない部分です。イエスは最終目的地に連れて行ってくれる道具ではありません。イエスは私たちとの交わりをお望みです。私たちは、聖書でイエスについて読んだり、イエスに祈ったり、イエスの教えに従ったりすることで、このお方と交わることができます。最後に、クリスチャンは福音の基本的な事実を見過ごしてはいけないと教えられます。福音の基本的な事実とは、私たちが汚れていることとイエスが私たちを永遠にきよめてくださったことです。私たちは神との正しい関係へと戻らせていただきました。この事実は、他では得られない喜びや自由を感じさせてくれるはずです。